

# 都市医師会 だより

渡島医師会

「胃がん検診の在り方を考える講演会」

胃がん検診の新しい潮流

—胃がんリスク層別化検査の意義及び現状—

渡島医師会

顧問

小笠原 実

毎年の胃がんの死亡者数は半世紀にわたって約5万人で推移し、ここ1～2年で減少傾向にあるが、依然として高い数値で持続している。各々の自治体は検診受診率向上の対策をし、国も対策型胃がん検診に従来のバリウム検査に加えて、2016年度からは胃内視鏡検査を承認し、実施が始まったが、目標の受診率50%にはほど遠い現状である。

一方、胃がんの原因は99%がピロリ菌によるもので、がん検診対象年代では依然として50%以上の高い感染率であることより、胃がん検診の始めに受診者のピロリ菌感染の有無をチェックできれば、その後の検診工程は効率よく進むものと考えられる。

実際に、胃がんリスク検診(ABC検診)という検査法があり、渡島医師会管内(1市9町)でも数年前から実施している自治体はあるが、まだ過半数以上は名称を知り興味はあるものの、実践には至っていない。この検診の理解を深め、計画・導入できるよう道南の自治体に参加を呼び掛け「胃がんリスク層別化検診(ABC検診)を学ぶ会」を今年4月に立ち上げた。北斗市・森町・知内町・福島町の自治体と渡島総合振興局・渡島医師会の構成で、情報交換の場を設ける活動を行うことを目的にした。

ちょうど6月30日から3日間、函館アリーナで第23回日本ヘリコバクター学会学術集会(会長は国立病院機構函館病院院長の加藤元嗣先生)が開催されることになり、ABC検診の提唱者である認定NPO法人日本胃がん予知・診断・治療研究機構理事の三木一正先生も来函することが分かったので講演をお願いしたところ、快く受けてくださった。

7月1日(土)夕方の『胃がん検診の在り方を考える講演会』には、函館市と渡島管内1市7町が参加し、52名の出席者が集まった。当会の光銭健三副会長の司会進行で、小笠原が「学ぶ会」の代表挨拶を

し、つづいて渡島保健所の山内克泰主査が「道南のがん検診の動向」を、北斗市の蠣崎雪子保健師が「胃がんリスク検診(ABC検診)の導入」について発表した後、三木一正先生が「胃がん検診の新しい潮流—胃がんリスク層別化検査の意義及び現状—」と題した特別講演を行った。

前半は、三木先生が開発した血清ペプシノゲン法(PG法;胃粘膜の萎縮の程度を表す)が胃がん発見に有用だと分かり、2008年に高松宮妃癌研究基金学術賞の荣誉に浴したことや、欧州の消化器病や内視鏡学会雑誌、英国消化器病学会雑誌でも費用対効果の高い検査法だと高く評価されたと話した。後半は、ピロリ菌感染(Hp抗体価)とPG法を組み合わせた「ABC法」を2011年の日本學士院紀要に発表したこと、欧州と英国の学会誌でも現在使用できる最良の非侵襲的な検査法であると紹介されたこと、国内では東京都の目黒区、品川区、西東京市、町田市のほか、高崎市、横須賀市など241の自治体が胃がんリスク検診として導入している実績を紹介し、町田市の胃がん発見率は従来のX線検診に比べ4倍も高く、高崎市の検診総費用は4年間で2億円の経費削減の成果を上げ、その費用対効果のことを強調した。

さらに、日本対がん協会会長の垣添忠生先生は、今年2月に「難治がん発見 進む新技術—これからの検診—」という新聞記事の中で「がんを早期に発見するには『リスクの層別化』も重要である。がんになるリスクの高い人はしっかりと検診し、低リスクの人は緩やかに検診する…良い例が胃がんである」と論評した。自分たちが提唱したABC検診を支持する言葉を発見し、感慨深いものがあつたと感想を語ってくれた。

今後、ABC検診は「胃がんリスク層別化検診」という表現に統一する提案がなされている。「胃がん撲滅への道を歩んで参ります」と力強く締めくくった講演の1時間半が短く感じられた、素晴らしい内容だった。

なお、この検診は三木先生の資料によると、道内では函館市、北斗市、福島町、本別町、由仁町の5市町が実施している現状である。今後、道南から全道の自治体に広がっていくことを期待している。

最後に、当日の会場を快く提供してくださった加藤元嗣先生に深謝いたします。



三木一正 東邦大学名誉教授